

- * 古代、父が決めた日に財産を相続した。それまでは、奴隷と変わらない生活をした。それと同じで私たちはイエス・キリストを知る前までは「幼稚な教えの奴隷」であった。私たちが相続するのは「神の国」である。神が持つておられるすべての良いものを受け継ぐということである。その最高のものは永遠のいのちである。
- * イエス・キリストが来られて相続するものがはっきりとした形でされた。このイエスは、神であると同時に「女から生まれたもの」、すなわちマリヤから生まれた人であった。そして「律法の下にあるもの」として生きられた。イスラエルの民が律法に従ったようにイエスも律法に従って生きられた。そして、本来律法を完全に守れる方であるが、人々が守れないゆえに神から受けるのろいを身代わりを受け、十字架で死なれた。「**律法の下にある者を贖い出すため**」であった。(ガラテヤ4 : 3 ~ 5 参照) 「**ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。**
子ならば、神による相続人です。」(ガラテヤ4 : 7)
- * パウロはガラテヤの信徒たちに言う。「**しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。**」(ガラテヤ4 : 8 ~ 10) ユダヤ人の中には、クリスチャンになった後も祭儀律法に基づいた様々な通過儀礼や慣習を守ろうとする者がいた。また、異邦人クリスチャンの中には以前に大きな影響を受けていた異教の慣習から抜けきれないものがいた。創造主と救い主イエスを知り、信じて救われて自由になったはずなのにどうして逆戻りするのだ、とパウロは嘆く。
- * 日本には、実に様々な宗教や文化に基づくしきたりや年中行事がある。また、迷信と思われるような根拠のない事柄も多い。結婚式は大安、葬式は友引を避けること、厄年に厄払いをするなど、多くの者がこれらのことにとらわれている。クリスチャンになったからといって、すべて身の回りの風俗習慣を捨てて生きることは難しい。ここに根付いている異教のことも関心をもって知ることが必要である。その上で、クリスチャンとしての証しをするために知恵と祈りでこの世を生きていきたい。また、教会も各種の年や記念日を守っている。ただ守るだけならパウロが批判したガラテヤの人たちと同じになってしまう。大切なことはその意味をよく理解し、神の国の相続人としてここを込めて行うことである。